

知求会ニュース

2024年09月

第91号

◎ 2023年度「日本モンゴル学会・モンゴル国大使賞」、受賞おめでとうございます！

近衛飛鳥さん(旧名:胡哈斯其木格)(博士後期課程国際学研究専攻第8期修了生)が2023年度「日本モンゴル学会・モンゴル国大使賞」を受賞されました。今後のご活躍を祈念しています。

◎ 掲載記事紹介

1. 放送大学栃木学習センター『とちの実 7月号 No.133』(令和6年7月)2面に、巻頭言「ことばの研究と学習:私の論文指導とボランティア活動をつなぐもの」と題して、**佐々木一隆**先生(宇都宮大学名誉教授)の寄稿が掲載されました。
2. 下野新聞(令和6年5月9日)1面に、「誰でも学べる場提供」「日本語自信ない 夜間中学通えず・・・」「宇大で「教室」開設から1年」と題して、「多様な学び教室」の**田巻松雄**先生(宇都宮大学名誉教授)らの記事が掲載されました。
3. 下野新聞(令和6年7月4日)3面に、「夜間中学 在り方考える」「宇都宮で15日シンポ」と題して、「とちぎに夜間中学をつくり育てる会」の**田巻松雄**先生(宇都宮大学名誉教授)らの記事が掲載されました。

◎ 国際学部だより 国際学部設置30周年記念シンポジウム開催案内

2024年10月12日土曜日に、峰キャンパス・大学会館多目的ホールにて13時30分から16時15分まで開催されます。卒業生および国際学部関係者のご参加をお願いします。詳細は以下のURLからご確認ください。

<https://jpn01.safelinks.protection.outlook.com/?url=https%3A%2F%2Fwww.utsunomiya-u.ac.jp%2Ftopics%2Feducation%2F012658.php&data=05%7C02%7C%7C585d24c90bd44cd8090608dcc8c53465%7C84df9e7fe9f640afb435aaaaaaaaaaaa%7C1%7C0%7C638605996973556915%7CUnknown%7CTWFpbGZsb3d8eyJWIjoiMC4wLjAwMDAiLCJQIjoiV2luMzIiLCJBTiI6Iik1haWwiLCJXVCI6Mn0%3D%7C0%7C%7C%7C&sdata=z%2BxUsXfhRUPGAgAY9h0uhFqZh6qciufG45kO6YeyJoY%3D&reserved=0>

◎ 放送大学栃木学習センター公開講演会開催

2024年8月3日土曜日午後2時から4時まで、放送大学学習センター2階大講義室にて、田巻松雄先生(宇都宮大学名誉教授)による「多様な学びの場をつくる」と題した公開講演会が開催されました。対面41名、Zoom10名の参加がありました。「とちぎに夜間中学をつくり育てる会」の小史がわかる貴重は講演会でした。

◎ 放送大学栃木学習センター面接授業

1. 中国語:基礎から文化への探訪 2024年10月13日(日)1時限~4時限
2024年10月20日(日)1時限~4時限

超 敏先生（宇都宮大学非常勤講師）

（国際学研究科博士後期課程国際学研究専攻第4期修了生）

2. 人の移動から考える文化人類学 2024年11月16日（土）1時限～4時限

2024年11月17日（土）1時限～4時限

リーペレス ファビオ先生（国際学部助教）

3. 国際移動と多文化共生 2024年12月14日（土）1時限～4時限

2024年12月15日（日）1時限～4時限

申 惠媛先生（国際学部助教）

研究室訪問 60 第 9 号から国際学研究科に関係する内外の先生方に寄稿をお願いしたコーナーを設けました。

「異動に当たって」

磯谷 玲

この4月から、1998年の赴任以来長くお世話になった国際学部を離れ、新しく設置された「データサイエンス経営学部」へと異動となりました。国際学部（国際学研究科）在籍中は大変お世話になりました。この場を借りて感謝申し上げます。

私が赴任した頃は本学でもインターネットの接続環境や個人個人のメールアカウント等のシステムは大学として用意されていましたが、実際の利用はそれほど浸透していませんでした。「私はメールは使わないんだよね」（念のため付言しておく「使えない」ではありません）と公言される先生方もおられ、「使えない」方や「使って」はいるがチェックの間隔が長い方などもおられて、メールで送ったので確認してほしい旨を電話でお願いするという本末転倒のようなこともしばしばありました。そんなことを思い出すと隔世の感があります。

国際学部では「国際経済論」や「アメリカの経済と社会」といった授業を担当していました。研究面では金融や金融制度に関するものが中心でしたが、ここでは少し違う話をしたいと思います。

ヴェルナー・トレスケン(1963-2018)という人が『自由の国と感染症』（原著は2015年、邦訳は2021年みすず書房出版）という本を書いています。アメリカの法制度と公衆衛生・感染症対策の関係を扱ったものですが、法制度が公衆衛生にプラスとマイナスの面があることを豊富な事例で示したもので、特に印象に残っているのは、感染症対策（天然痘のワクチン接種）と法制度の関係です。アメリカでは国や関係機関が住民に何を強制できて、何ができないかが憲法によって定められている（もちろん個別の判断は裁判所が行うわけ

ですし、また州によって違いがあるわけですが) ので、ワクチン接種に公衆の利益があっても、個人の選択の方が優先される場合がある、という点です。

また「自由な選択」を可能にする社会が経済を発展させ、そのことは上下水道の整備・発展を通じて公衆衛生に貢献した、ということも言っています。

つまり、選択の自由を保障したアメリカの憲法体制が、一方では公衆衛生対策を後退させ、他方では、経済発展を促し（そしてその結果主として上下水道の整備によって公衆衛生を前進させた）ということです。

トレスケンの本を読んで思うことは、まずアメリカが憲法とその精神に沿った国づくりや運営をしている、ということです。最近の、トランプ前大統領をめぐる連邦最高裁の評決には首を傾げざるを得ない点もありますが、凝集力を憲法に求めるのはその歴史によるところが大きいのでしょうか。憲法に基づいた国づくりや運営ということは、アメリカに限らず先進国には共通しており、ある意味当然で驚くことではないのですが、個人的には「そこまでやるの」という妙な感心がありました。

もう一つは、全体を概観すること、あるいは全体の連関の中で問題を考察することの重要性です。先に紹介した例の場合、選択の自由が経済発展を促した、という側面だけを取り上げると、おかしなことになってしまいます。とはいえ近代科学の方法的特徴の一つは「範囲を限定し、問題を限定し」ということなので致し方のないところもあります。取り組む側からいえば「視野の広さ」と「専門の深さ」は例えば時間の割振一つとっても、せめぎあうもので、全部やる、というのは難しいのですが、少なくとも意識しておくことは大事ではないかと思えます。

金融の分野に即していえば、この「選択の自由」ということは社会保障の薄さ・弱さと相まって旺盛な投資意欲へつながり、新しい分野に資金を供給する源泉の一つになりました。同時に、投資に回せるお金の多寡がますます経済格差を拡大することにもつながりました。

国際学部の特徴の一つは学際性にあると思います。私自身は伝統的な経済学部の流れで育ちましたが、授業や先生方との対話から様々な「学際的」な刺激を与えられました。諸業務を理由としてその刺激を研究成果へと繋げることができていないのは忸怩たるところですが…。

愚にもつかないことを、また「エビデンス」のないことをダラダラと書き連ねてしまいました。

冒頭に述べましたように学部は異動したのですが、新学部は峰キャンパスの 5 号館（主に C 棟）が拠点なのと、諸般の事情により部屋は移動していません。また大学院は先の改

組で 1 研究科となった関係で所属学部とは切り離されているので、そちらも変化はありません。

今しばらく勤務することになりますので、お近くにおいでの際は是非お立ち寄り下さい。

(2024 年 8 月 20 日原稿受理)

博士録 65 第 22 号から国際学部、国際学研究科に関係する同窓生に寄稿をお願いしたコーナーを設けました。

「戦後日本のナショナリズムと工芸技術との関係性について —手漉き和紙技術の文化財指定を中心に—」

任 曉艶

論文要旨

製紙業界において、紙を作る方法には手で漉く方法と機械で抄く 2 つがあるとされている。前者は手漉き(手すきという表記もあり)、後者は機械漉きと呼称されている。現代日本において和紙という言葉聞いた時に、日本の伝統的な紙を連想する人は多いと思われる。伝統的な紙とは如何なる紙のことであろうか。文化史や文化財に関する研究所や解説書には、「製紙技術が昔ながらの作り方」、「昔から作られてきた紙」、「日本でしか作られていない紙またはその製紙技術」と表現されることがある。その一方で、和紙という言葉には明確な定義がなく、地域における情報発信の際には、和紙という言葉で手漉き紙と機械漉き紙の両方を指す事例が散見される。また手漉き紙の場合、技術という無形の側面、そして、紙という有形の側面で和紙という言葉が用いられる。前者は伝統的な工芸技術として文化庁関係者によって無形文化財に指定された手漉き製紙技術のことが挙げられ、後者は伝統的な技術又は製法で作られた紙として経済産業大臣によって伝統的工芸品に認定された紙商品のことが挙げられる。

本研究は、和紙という言葉の多義性を出発点とし、戦後の文化財保護行政において「伝統」という意味が与えられた工芸技術の側面には、現在に至るまでに如何なる変容がみられ、そこに如何なる社会的要因があったのかを検討した上で、美術史学の立場から、「工芸」の枠組の変容について論じることを目的とする。まず、1964 年から 1967 年にかけて小路位三郎によって行われた文化財保護委員会の全国和紙実態調査を手がかりに、文化財保護行政における「手漉和紙」の創出過程を検討した。そこから、近代化しつつあった手漉き製紙技術の実態に基づき、製紙試験場の視座による伝統的製紙工程の決定について論じた。また、日本近代美術史の先行研究を踏まえながら、手漉き紙というものが 1950 年代まで政府機関に「工芸」として認められなかった一方で、1960 年代の重要無形文化財指定の過程において工芸品と結びつけられたことが分かった。この文化財保護行政の実践の中には、1930 年代の思潮の活用、1960 年代までの科学的成果の応用、そして、それまでの美術行政における歴史という基準の継承があったのである。

次に、和紙について、地域での宣伝や情報発信のあり方、紙漉き職人の生産と販売という角度から、「伝統工芸」としての「和紙」観の形成と要因を考察した。小川地域で発行された観光資料には、行政機関に「伝統」と認められていない製紙技術と紙商品があると明らかになった。その社会的要因について小川と那須烏山の両地域で、職人にインタビュー調査を実施し、製作と販売の両面から検討した。そこから手漉和紙技術の保持者が日常生活で行政的に「伝統」と認められていない紙を生産したり売ったりするのは消費者からの要求に応じるためであることが分かった。また、烏山和紙会館で機械漉き紙も販売されていた。そして、このような生産販売の中では、素材としての多様な紙が紙漉き職人の手から離れ、消費者の手によって再生産されるというケースがあった。つまり、和紙において、紙漉き職人と消費者との関係性が表裏一体であり交渉性が高く、両者の交渉の中で「伝統工芸」としての「和紙」観が形成されていったのである。

論文執筆にまつわるエピソード

本論文を執筆するにあたり、指導教官である松金先生をはじめ、副指導教官の中村先生、松井先生、そして、審査員の出羽先生、清水先生からご指導、ご支援をいただきました。心から感謝申し上げます。

論文を執筆中に行き詰まった時がありました。その時、それまでのゼミ発表、国際学基礎演習発表会、学会発表、学会投稿などのことを思い出しながら、それぞれの場でいただいた先生たちのご指摘やコメント、自分の多様な試行錯誤の経験を活かすことで、予備論文の提出に至ることができました。

予備論文から本論文へと仕上げるまでは、自分の気持ちが一番不安で、身体も弱まった時期でした。最後まで筆者を支えて、日本語の修正等を丁寧にしてくださった松金ゼミに所属する学部生の皆さんにお礼を申し上げます。

長期間の論文執筆に大切だと思ってお伝えたいこととして、十分な睡眠時間を取ることに、そして、バランスのいい食べ物を摂取すること、さらに、計画を立てた上で存分に遊ぶことが挙げられます。

(国際学研究科国際学研究専攻 第12期修了生・国際文化研究専攻 第16期修了生)
(2024年5月27日原稿受理)

知究人 37 第9号から特に、国際学部出身者で他大学院へ進学された方に、寄稿をお願いしたコーナー(ちきゅうびと)を設けました。

海外だより 35 第27号から国際学研究科、国際学部出身の海外在住者からの寄稿をお願いしたコーナーを設けました。

海外留学今昔 32 第 35 号から国際学部出身者および在学者を中心とした海外留学体験の寄稿をお願いしたコーナーを設けました。自薦・他薦を問いませんので、**海外留学経験者および海外留学中の在学者の積極的な情報提供**を事務局にお寄せ下さい。

学生サロン 23 知求会ニュース第 41 号より現役学部生・院生によるコーナーを設けました。自薦・他薦を問いませんので、**現役学部生の積極的な情報提供**を事務局にお寄せ下さい。

キャリア指南 15 現役学部生に向けた企画として、宇都宮大学全学部から国際機関をはじめ、NGO・NPO や企業などで活躍する先輩方に執筆していただくコーナーを設けました。自薦・他薦を問いませんので、**キャリア指南にふさわしい卒業生の積極的な情報提供**を事務局にお寄せ下さい。

フォーラム 2024 年の長月を迎えて、皆様忙しいことと思います。（原稿集めに苦労しています。）

「宇都宮大学の学恩を浴びて」

千葉工業大学社会システム科学部

未来変革科学科助教

近衛 飛鳥 = 胡哈斯其木格

2009 年から 2019 年までの 10 年間、宇都宮大学に在籍し、そこでの経験が私の 20 代の大部分を占めています。この期間、私は宇都宮大学での学びを通じて、多くの貴重な思い出を築くことができました。

2017 年 4 月、千葉工業大学で職に就き、社会人としてのキャリアをスタートさせました。仕事を通じて多くの人々と出会い、様々な経験を積むことができました。並行して、2019 年には博士学位論文の審査を申請し、同年 9 月末には無事に博士後期課程を修了しました。研究者としての第一歩を踏み出しつつ、その後は教育職へとシフトするために努力を重ね、2022 年度からは教壇に立つという夢を実現しました。それと同時に生涯日本で生活して行くことを決意し、日本国民近衛飛鳥（KONOE ASUKA）となりました。

教育者としての活動を通じて、教えることの難しさや奥深さを実感し、これまで私を導いてくださった先生の偉大さを改めて理解することができました。教育の現場に立つようになり、日々多くの学びと挑戦に直面しています。同時に、学生が課題を乗り越え、自らの力で成長していく姿を見ることができるのは、教員として大きな喜びでもあります。教員としての責任の重さを感じつつも、この職業の意義とやりがいを強く感じています。これからも、学生たちと共に成長し、より良い教育を提供できるよう、自己研鑽に努めながら個人研究にも力を入れています。

宇都宮大学で10年間にわたり惜しみない指導をしてくださった恩師の方々には感謝の念を込めて、博士学位申請した論文を改訂し、2023年末に単著『西洋医学の内モンゴル伝播 西洋宣教師/帝国日本/モンゴル知識人』（風響社）を出版した際には、宇都宮大学での経験と指導がいかに関心を支えていたかを改めて感じました。ありがたいことに、この著書が「日本モンゴル学会」の先輩方から評価され、2024年5月には「日本モンゴル大使賞」をいただくことができました。このような成果を挙げることもできたのも、松金公正先生をはじめとする宇都宮大学国際学研究科の教員や職員の皆様、そして同窓の先輩後輩たちの温かいご支援のおかげです。今後は、私自身が受けたご恩を、次世代の学生たちに還元できるよう、日々努力を続けてまいります。

最後に、このような機会を与えてくださった土屋会長に心から感謝申し上げます。このニュースを通じて、多くの同窓の先輩方や後輩たちと繋がっていけることを楽しみにしています。

(国際学研究科博士後期課程国際学研究専攻 第8期修了生・
国際学研究科国際文化研究専攻 第13期修了生)

(2024年8月19日原稿受理)

「未来の日本語教育に向けて」

トヨタ タンクトゥ

幼い頃、初めて触れた日本はホンダのバイクでした。その日のワクワクした気持ちを今も覚えています。当時は日本というものは意識していませんでしたが、成長するとともに、少しずつ日本のものが周りに増えてきて、やがてそれらが日本から来たという事を知るようになりました。身の回りに増えた日本に興味を覚え、大学では日本語学科に進学し、日本について色々と勉強しました。その中で、交換留学プログラムにも参加して1年間の留学の機会を得たのですが、そこで教育に対するベトナムと日本の考え方の違いに非常に感銘を受けました。

ベトナムでは、学習者の語学能力を向上させたい場合、テストなどで評価しやすい語彙や文法をひたすら覚えさせがちです。日本語教育でも同様で、日本人がコミュニケーションをする際にどうしてそのような文を組み立てるのか、なぜその語彙を選択して話をするのか、論理的に文を構築するにはどうしたら良いかというコミュニケーション上重要な点を理解させないまま教育が終わってしまいます。その結果、日本語能力試験に合格して綺麗な発音で話すことまでは出来ても、実際には、筋道立てて話をしたり、会話内容を正確に理解したりすることができない学習者をたくさん見てきました。そのような学習者は、ベトナム語と似た文法構造を持つ英語のような他の外国語に比べて、文法構造が全く異なる日本語に同等の時間と労力を費やしても技能の向上が見られないことから、日本語が曖昧

で文化的に特殊だという謬説に飛びついたりして学習意欲を低下させがちだとも指摘されています。特に、文章の多義的曖昧さに起因する読解上の問題の解決が重要であるとされていましたが、ベトナム語と日本語の文法上の曖昧さの違いについては、ほとんど研究がなかったため、博士後期課程で「ベトナム人日本語学習者にとっての文章の多義的曖昧さに起因して発生する読解上の問題」を言語的要因と認知的要因の両側面から明らかにすることに取り組みました。

研究の結果、ベトナム語と日本語の曖昧さの程度は一部を除き、ほとんど変わらないということが分かりましたが、その一方でベトナム語の文法構造上発生しない自由度が日本語の文には存在することから、その部分が学習者の理解の妨げになっていることを明らかにできました。これは語彙や文化的知識が不足するほど、より強く影響することも示唆されており、ベトナムで十分すぎるほどやられていると思っていた基礎的知識の学習に偏りがあることが分かって新鮮な驚きがありました。この構造的な違いによる理解のし難さは日本人がベトナム語を理解するうえでも同様であるため、日本人学生のベトナム語学習に役立てています。

現在は、学生時代に得たこれらの貴重な知見をベトナムにおける日本語教育にフィードバックする場として、産学連携を念頭に置いた日本語学校を整備するため、日本とベトナムを行き来しながら、地道に色々な分野の言語や文化を学び、開校の規模や場所の選定を行っている所です。

最後になりますが、日越両国の社会に貢献する基礎として役立てるための研究を支えて下さいました諸先生方や研究室の皆様にご報告を元気で過ごしていることを報告すると共に、当時を振り返り感謝を伝えたいと思います。どうもありがとうございました。

(国際学研究科博士課程国際学研究専攻 第13期修了生・
国際学研究科国際文化研究専攻 第19期修了生)

(2024年8月21日原稿受理)

東南アジア支部だより

第63号から、タイ在住の**大畑美優紀**さん(国際学部社会学科第1期生・国際学研究科国際社会研究専攻第1期生)が発起人となり、国際学部同窓会および大学院国際学研究科同窓会の東南アジア支部としてニュースレターを創刊しました。2019年4月から、年4回から**年2回発行(4月1日、9月1日)**の変更になりました。

今回の第18号の内容は、1. 創設7周年企画 これだけは食べられなかった東南アジアの珍品! 2. タイの昨今(第18回) 3. 同窓生インタビューリレー 柴田友美子さん 4. 連載コーナー トコロ変わればザ★談会(第11回) あなたの目線でああなたの住む地域の健康志向度合を教えて! 5. 連載コーナー 狙えインスタ映え!? アジア取材雑記

第 14 回 『次期大統領は WANTED』 6. 連載コーナー ～懐かしの一枚～ とともに感じる東南アジア (第 14 回) 装いを変えてパリに流す汗 です。

EU 支部だより

知求会ニュース第 38 号からイタリア在住の松原真実子さんによる知求会 EU 支部だより「Newsreel World」を発行してきました。今回の 51 号の内容は、1. イタリア ミラノ空港、故ベルルスコーニ元首相名への改名承認 反発も 2. EU 支部だより 一空港の名称一です。

編集者のひとりごと

●本年 5 月 25 日土曜日に新しく開設された「データサイエンス経営学部」の記念式典が、JR 宇都宮駅東口の交流拠点施設ライトキューブ宇都宮で開催されました。国際学部同窓会の行澤真悟同窓会副会長・篠崎みのり同窓会理事とともに出席してきました。当日の式次第は以下の通りです。1. 開式の辞 2. 学長挨拶 池田幸学長 3. 来賓祝辞 飯塚真玄様 (株式会社 TKC 名誉会長)・井上睦子様 (文部科学省 高等教育局 国立大学法人支援課長)・北村一郎様 (栃木県副知事) 4. 新学部設立経緯 長谷川光司 データサイエンス経営学部長 5. 教員紹介 6. 閉式の辞 なお、第 1 期生は 59 人が入学しました。

●記念式典後の祝賀会には国際学部同窓会役員方と参加し、コロナ以後の他同窓会関係者や石田朋靖前学長 (高崎健康福祉大学学長)、松金公正副学長、倪永茂先生、磯谷玲先生らと歓談を楽しみました。

●お盆休みの 8 月 13 日に、やっとな LRT (次世代型路面電車) のライトラインに乗りました。平日は前橋市に勤務しているため、週末の限られた時間ではなかなか乗ることができなかったのです。1 周年の誕生日を前に乗ることができ一安心といったところです。終点までの往復の小旅行気分を満喫しました。課題としては回遊性のある観光スポットを開発していくことが必要に思いました。

●国立工芸館が金沢市に移転してから、なかなか行けていないのが残念です。聞くところ、金沢市の場合、新しい観光スポットの出現により年々、回遊性がたかまっているようです。大学院生時代に、学会発表で 2 回ほど訪問したこともありましたが。最初の金沢訪問は大学生時に、金沢市内にあった箱階段のある町家のユースホステルでした。

編集後記：2010 年 4 月 26 日から **知求会ニュースのバックナンバー**は **国際学部同窓会 HP** (<http://www.afis.jp>) で見られるようになっていきます。

同窓会会員の皆様へのお願い：**住所、勤務先および携帯電話番号、メールアドレスの変更の際は事務局へメールして下さい。**chikyukai@gmail.com